

[研究報告]

北海道内の看護学生における基礎看護学実習Ⅱ前後での
首尾一貫感覚の変化と実習関連満足度の関係米田 政葉¹⁾, 岩田 直美²⁾

1) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科 博士後期課程

2) 名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード

基礎看護学実習Ⅱ, 首尾一貫感覚, 実習満足度, 看護学生

I. 背景・意義・目的

Sense of Coherence (首尾一貫感覚, 以下SOCとする)とはA.アントノフスキーによって提唱された「自分の生きている世界は首尾一貫している, 筋道が通っている, 訳が分かる, 腑に落ちるという感覚」及びこれを測定する尺度であり, 健康生成能力, ストレス対処能力ともいわれる。処理可能感(何とかなる, 何とかやっていけるという感覚), 把握可能感(自分の置かれている, あるいは置かれるであろう状況がある程度予測でき, または理解できるという感覚), 有意義感(日々の営みにやりがいや生きる意味が感じられるという感覚)の3つの下位概念から構成される(山崎・戸ヶ里・坂野, 2012)。SOCについて先行研究を概観すると, 種々のストレスを低減し, 心身の疾病を予防する可能性が示唆されている(木口・米田・安藤, 2017; 峯岸・坂手・志渡, 2010; 澤目・佐藤・上原・蒲原・岡田・志渡, 2011a; 澤目・佐藤・上原・蒲原・岡田・志渡, 2011b; 澤目・上原・佐藤・池森・志渡, 2012; 志渡・澤目・上原・佐藤・池森・長谷川, 2011; 志渡・上原・佐藤・澤目・池森・長谷川, 2012; 志渡・米田・吉田, 2014; Surtees, Wainwright, Luben, Khaw, Da, 2003; 友岡, 斎藤, 丸山, 山岡, 谷川, 2017; 山崎他, 2012; 米田, 高橋, 佐々木, 高橋, 米田, 志渡, 2018)。

A. アントノフスキーは成人前期は幼児期, 思春期に次ぐSOCの重要な形成時期であると述べている(山崎他, 2012)。SOCを形成する要因について, 一貫性の経験(ルールや規律が明確で, さらにそのルールについての責任の所在も明確で, ルールの他の全体的な価値観も明確であること), 過少負荷と過大負荷のバランスの経験(まわりとそれが持っている能力や手段を十分に使う必要もないくらい弱い要求の間の

バランスが取れた経験), 結果形成への参加(自分たちの前に設定された課題を快く受け入れ, 自分たちでその課題を行うことに責任をもって, 何をするのかしないのかを決定する)としている(山崎他, 2012)。

基礎看護学実習Ⅱは学生が初めて長期にわたり患者と向かい合う実習である。実習期間中に病院において原則として一人の患者を継続的に受けもち, 担当教員, 実習指導者の助言指導のもとで患者が必要としている看護を計画し, 実施, 評価していくことを通して看護過程の方法を学ぶものである。この実習を通じ, 看護専門職者としての倫理観および態度や姿勢, さらに患者との援助的関係についても学習することが求められる。

日時・佐藤(2008)は基礎看護学実習において学生は患者理解, 個別に合わせた援助の実施, 学習環境の調整, 自己との向き合い方について困難を感じると述べている。青木・岡田・関谷・徳永・相原・和田・野本(2008)は基礎看護学実習中に学生が抱える困難感について, 患者の個別的な状況に応じた技術の応用ができない, 学内の設備や演習と実習で使用した方法とが異なるため技術の応用ができない, 技術の実施方法がわからない, 患者の意向をうまく利用できないなどを挙げている。さらにこれらについて, 学生は自己で解決を図るほか教員や指導者の助言を受け実施するなどしていることを示している。つまり, 学生は, 実習中に様々な困難を体験し, それについて自身の持つ様々な資源を活用し解決しようとする過程を経験する。これは, 上述したSOCを形成する要因が多く含まれていると考える。

看護学実習前後でのSOCの変化について先行研究を概観すると, 実習前と比較し実習後にSOCが上昇したと指摘されている(菊地・原田・前山, 2016; 大澤・松下, 2012)。一方, 実習後にSOCが低下したとの報告(縦野・金子, 2016)もされており, 一貫した知見が得られていない。

そこで本研究は, 基礎看護学実習Ⅱ前後でのSOCの変化について検討を行うとともに, その関連要因に

<連絡先>

米田 政葉

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

E-mail: y-masaha@hoku-iryu-u.ac.jp

ついて特に教員や実習指導者との関係を中心とした実習満足度に着目し、検討をおこなう。これにより、健康状態を保ちながら有意義な実習を送れるように支援する方策についての示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 調査期間・対象・方法

実習前である2018年9月と実習後の10月に北海道内の看護系高等教育機関に所属する学生54名を対象に無記名自記式質問紙を用いた集合調査を実施した。回収数42名（回収率77.7%）、有効回答数42名（有効回答率100.0%）であった。

本研究は実習前後比較での比較を実施するため、①実習前に関しては講義時に調査票及び無地の封筒を配布し、回答者自身が封筒に任意の英数記号による6桁のコードを記入してもらい一度回収した。②実習後については、調査票とともに自身で付したコードの記入された封筒を配布しそれに入れてもらい回収した。なお、学生間でコードが重複するケースはなかった。調査前後ともに1週間以内に鍵付きの回収箱に入れてもらった。

2. 調査項目

調査項目は、①基本属性4項目、②SOC日本語版13項目、③実習満足度に関する14項目とした。

3. 分析方法

実習前後でのSOC総得点及び各下位尺度得点の変化を検討するため、対応のあるt検定を行った。その後、SOC総得点及び各下位尺度得点のうち実習前後で有意な変化がみられた項目を対象とし、得点が上昇したか否かで二群化したものを目的変数、実習後の実習満足度を説明変数とし χ^2 検定にて関連を検討した。

4. 分類方法

分析に使用した項目に関する分類方法は下記の通りとした。

SOCは7件法13項目から構成される尺度であり、把握可能感5項目、処理可能感4項目、有意味感4項目の3つの下位尺度から構成される。各項目に1点から7点を配点し既定の方法で合計点を算出した。合計点数は13～91点である。実習前後でのSOC得点総得点及び各下位尺度得点の変化を計算するため、実習後の得点から実習前の得点を減じ差を算出した。差が0点以下であったものをSOC不変・低下群、1点以上であったものをSOC上昇群とした。

実習満足度については、「日々の学習を生かし、実習を展開できたと感じる」、「実習指導者は、あなたの状況に応じてアドバイスをしてくれたと感じる」、「実習指導者に、積極的に質問したと感じる」、「実習指導

者は、あなたが自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれたと感じる」、「実習指導者は、記録物に対して指導・助言をくれたと感じる」、「実習指導者と学生間のコミュニケーションはよかったと感じる」、「指導教員は、あなたの状況に応じてアドバイスをしてくれたと感じる」、「指導教員に、積極的に質問したと感じる」、「指導教員は、あなたが自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれたと感じる」、「指導教員は、記録物に対して指導・助言をくれたと感じる」、「指導教員と、学生間のコミュニケーションはよかったと感じる」、「学生同士で協力して実習を行えたと感じる」、「実習で自分は成長できたと感じる」、「実習全般について満足できたと感じる」の14項目で質問した。それぞれ、10件法で質問し、1から6に該当するものを低中満足度群、7から10に該当するものを高満足度群と定義した。

5. 倫理的配慮

本研究は無記名自記式質問紙を用いて行った。1) 結果の公表にあたって、個人を特定されることはないこと、2) 得られたデータは、研究以外の目的で使用しないこと、3) 調査に参加しないことで不利益を被ることはないこと、4) 途中での同意撤回を認めること、5) 得られた結果は公共の学会・学術誌にて発表予定であることを口頭及び書面にて説明し、同意を得られたもののみを分析の対象とした。なお、名寄市立大学倫理審査委員会において倫理審査を受け承認を得た（受付番号18-014）。

III. 結果

1. 基本属性

対象集団の基本属性は男性2名（4.8%）、女性40名（95.2%）であり、平均年齢は19.6±1.5歳であった。

2. 実習前後でのSOC総得点及び下位尺度得点の関連

表1に実習前後におけるSOC総得点および各下位尺度得点の平均値を示した。SOC総得点について実習前後で有意な変化はみられなかった。下位尺度に着目すると、実習前と比較し実習後で平均点が有意に上昇した項目は、把握可能感、有意味感の2項目であった。

表1. 実習前後でのSOC総得点及び下位尺度得点の変化

	実習前 平均点(SD)	実習後 平均点(SD)	p
SOC総得点	51.7(10.9)	52.5(9.6)	0.59
把握可能感	16.1(4.6)	17.4(4.1)	0.03
処理可能感	15.2(4.8)	16.0(4.0)	0.17
有意味感	16.4(3.8)	19.1(5.9)	0.01

p: 対応のあるt検定

3. 把握可能感と実習満足度の関連

表2に把握可能感の変化と実習満足度の関連を示した。把握可能感上昇群と、不変・低下群で該当率に有意な差が見られた項目はなかった。

4. 有意味感と実習満足度の関連

表3に有意味感の変化と実習満足度の関連を示した。有意味感不変・低下群と比較し有意味感上昇群で有意に該当率が高かった項目は、「日々の学習を生かし実習を展開できた」、「実習指導者は状況に応じてアドバイスしてくれた」、「実習指導者に積極的に質問した」、

「実習指導者は自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれた」、「実習指導者と学生間のコミュニケーションは良かった」、「実習指導者は記録物に対して指導・助言をくれた」、「指導教員は状況に応じてアドバイスをしてくれた」、「指導教員に積極的に質問した」、「指導教員は自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれた」、「指導教員は記録物に対して指導・助言をしてくれた」、「指導教員と学生間のコミュニケーションは良かった」、「実習で自分は成長できた」、「実習全般について満足できた」の13項目であった。

表2. 把握可能感と実習満足度の関連

	n (%)		p
	不変・低下群 20(100.0)	上昇群 22(100.0)	
日々の学習を生かし実習を展開できた	13 (65.0)	10 (45.5)	0.20
実習指導者は状況に応じてアドバイスしてくれた	13 (65.0)	17 (77.3)	0.38
実習指導者に積極的に質問した	9 (45.0)	13 (59.1)	0.36
実習指導者は自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれた	14 (70.0)	16 (72.7)	0.85
実習指導者と学生間のコミュニケーションは良かった	14 (70.0)	13 (59.1)	0.46
実習指導者は記録物に対して指導・助言をくれた	14 (70.0)	14 (63.6)	0.66
指導教員は状況に応じてアドバイスをしてくれた	13 (65.0)	14 (63.6)	0.93
指導教員に積極的に質問した	11 (55.0)	14 (63.6)	0.57
指導教員は自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれた	12 (60.0)	14 (63.6)	0.81
指導教員は記録物に対して指導・助言をしてくれた	16 (80.0)	14 (63.6)	0.24
指導教員と学生間のコミュニケーションは良かった	14 (70.0)	11 (50.0)	0.19
学生同士で協力して実習を行えた	20 (100.0)	21 (95.5)	0.34
実習で自分は成長できた	18 (90.0)	17 (77.3)	0.27
実習全般について満足できた	16 (80.0)	16 (72.7)	0.58

p: χ^2 検定

各項目について10件法で質問し7~10に当てはまるものを高満足度群とした

表3. 有意味感と実習満足度の関連

	n (%)		p
	不変・低下群 13(100.0)	上昇群 29(100.0)	
日々の学習を生かし実習を展開できた	4 (17.4)	19 (82.6)	0.04
実習指導者は状況に応じてアドバイスしてくれた	4 (13.3)	26 (86.7)	>0.01
実習指導者に積極的に質問した	3 (13.6)	19 (86.4)	0.01
実習指導者は自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれた	5 (16.7)	25 (83.3)	>0.01
実習指導者と学生間のコミュニケーションは良かった	5 (18.5)	22 (81.5)	0.02
実習指導者は記録物に対して指導・助言をくれた	4 (14.3)	24 (85.7)	>0.01
指導教員は状況に応じてアドバイスをしてくれた	3 (11.1)	24 (88.9)	>0.01
指導教員に積極的に質問した	4 (16.0)	21 (84.0)	0.01
指導教員は自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれた	4 (15.4)	22 (84.6)	0.01
指導教員は記録物に対して指導・助言をしてくれた	4 (13.3)	26 (86.7)	>0.01
指導教員と学生間のコミュニケーションは良かった	2 (8.0)	23 (92.0)	>0.01
学生同士で協力して実習を行えた	13 (31.7)	28 (68.3)	0.50
実習で自分は成長できた	8 (22.9)	27 (77.1)	0.01
実習全般について満足できた	5 (15.6)	27 (84.4)	>0.01

p: χ^2 検定

各項目について10件法で質問し7~10に当てはまるものを高満足度群とした

IV. 考察

本研究の結果、SOC総得点について実習前後で変化が見られなかった。先行研究を概観すると、実習前と比較し実習後で点数が変化すると報告されており(菊地他, 2016; 大澤・松下, 2012; 縦野・金子, 2016)、これと異なる結果であった。これについて、先行研究よりも対象者数が少ないこと、先行研究と比較し、実習後の調査時期が遅い事が影響していると考えられる。下位尺度に着目すると、把握可能感、有意味感について実習前と比較し実習後で得点が有意に上昇していた。これは、前山他(2017)を一部支持する結果であった。一方で縦野・金子(2016)と異なる結果であった。縦野・金子(2016)は、実習後の調査を実習終了時に行ったため、実習への意味づけや感情面の整理が不十分であり一時的にSOCが低下していた可能性を指摘している。本研究では、実習後のアンケートについて実習終了から1週間後の実習報告レポート回収時に行った。レポート作成に向けた学生間や教員等とのディスカッションを通じて実習体験が一定程度昇華できており、把握可能感、有意味感が上昇したと考える。

有意味感が上昇した群は総じて、実習指導者が状況に応じてアドバイスをしてくれ、積極的に質問し、自分の考えに基づいて行動することを尊重してくれたと感じており、さらに、実習指導者と学生間のコミュニケーションが良く、記録物に対してのアドバイスをしてくれたと感じていた。また、実習指導教員に対しても同様の感覚を得ていた。さらに、実習で自分は成長できた、実習全般について満足できたと感じていた。山中・平賀・中本・盛岡・三浦・藤原(2016)は成人看護学実習を履修した学生について生活状況や社会状況、学習状況が良好であるほどSOCが高いことを指摘している。また、米田他(2018)は高等教育機関に所属する学生についてSOCが高いものは、教員との関係などの学校生活への満足度が高いことを指摘されており、これらの結果に一部近似する結果が得られたものと考えられる。このことから、実習場面における教員や実習指導者と実習生の関係性について、実習生自身が良好でサポートティブであると知覚できるようなかわりを持つことが重要であると考えられる。

本研究の有効性は、これまで十分に検討されてこなかった基礎看護学実習Ⅱ前後でのSOCの変化及びそれに関連する要因について検討し、学生が心身の健康を保ちながら有意義な実習を送れるよう支援するための示唆を得たことである。また、限界として対象者数が少ないこと、調査項目について実習指導者及び実習指導教員との関係を中心に質問しており、同期との関係や実習内容に関して十分に触れていないこと、看護系高等教育機関1校のみが対象であることがあげられる。今後、対象者数を増やすとともに、実習内容やストレス度についても検討を行うことが課題となる。

V. 謝辞

本研究を実施するにあたりご協力いただいた教員の皆様、並びに学生の皆様に感謝いたします。

引用文献

- 青木光子, 岡田ルリ子, 関谷由香里, 徳永なみじ, 相原ひろみ, 和田由香里, 野本百合子(2009). 基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処方法. 愛媛県立医療技術大学紀要, 5, 1, 57-64.
- 木口幸子, 米田政葉, 安藤陽子, 小川克子, 志渡晃一(2017). 北海道内の高等教育機関に所属する学生のCES-DとSOCの関連. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 13, 49-54.
- 菊地美保子, 原田美枝子, 前山直美(2016). 小児看護学実習におけるSense of Coherence (SOC) とストレスとの関連ループリックを導入して. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 3, 47-52.
- 前山直美, 原田美枝子, 菊池美保子(2017). 知識・技術・態度を総合的にアセスメントする評価法導入の妥当性～母性看護学実習前と実習後のSense of Coherenceとの関連～. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 4, 33-37
- 峯岸夕紀子, 坂手誠治, 志渡晃一(2010). 本学新入学生のうつ傾向とその関連要因. 北海道医療大学学部学会誌 6, 87-91.
- 大澤優子, 松下年子(2012). 精神看護学実習前後における学生のSOC(首尾一貫感覚)の変化. 埼玉医科大学看護学科紀要, 5(1), 1-7.
- 澤目亜希, 佐藤徹光, 上原尚紘, 蒲原 龍, 岡田栄作, 志渡晃一(2011). 看護系専門学校生の抑うつ症状とストレス対処能力(SOC)との関連について. 北海道医療大学学部学会誌 7: 89-92.
- 澤目亜希, 上原尚紘, 佐藤徹光, 蒲原 龍, 岡田栄作, 志渡晃一(2011). 大学新入学生の抑うつ症状とその関連要因(第2報)～CESDの高得点群の特徴について～. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 7, 93-95.
- 澤目亜希, 上原尚紘, 佐藤徹光, 池森康裕, 志渡晃一(2012). 大学新入学生における抑うつ症状とその関連要因. 北海道医療大学学部学会誌, 8, 57-61.
- 志渡晃一, 澤目亜希, 上原尚紘(2011). 首尾一貫感覚(SOC)と抑うつ症状との関連—高等教育機関に所属する学生を対象として—. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 18, 43-48.
- 志渡晃一, 上原尚紘, 佐藤徹光, 他(2012). 首尾一貫感覚(SOC)と抑うつ症状との関連—医療系大学に所属する学生を対象として—. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 19, 75-79.
- 志渡晃一, 上原尚紘, 佐藤徹光, 五十嵐礼奈, 米田政葉, 堂端さやか(2013). 高等教育機関に所属する

- 学生のひきこもり親和性と抑うつ症状, SOCの関連. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9, 121-124.
- 志渡晃一, 米田政葉, 吉田貴普 (2014). 医療福祉系大学に所属する学生の抑うつ症状とその関連要因について. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 10,39-42.
- Surtees P, Wainwright N, Luben R, Khaw KY, Day N (2003). Sense of coherence and mortality in men and women in the EPIC-Norfolk United Kingdom prospective cohort study. *American Journal of Epidemiology*, 158, 1202-1209.
- 縦野香苗, 金子さゆり (2016). 基礎看護学実習における看護学生のSOCの変化とそれに影響するストレス要因. 名古屋市立大学看護学部紀要, 15, 15-21.
- 友岡清秀, 齊藤 功, 丸山広達, 山岡傳一郎, 谷川 武 (2017) 地域住民における未病と自覚的ストレス及び首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) との関連: 東温スタディ. *ストレス科学研究* 32: 29-40.
- 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典, 坂野純子 (2012). ストレス対処能力SOC, 9,40,45,69-87. 有信堂高文社.
- 山中政子, 平賀元美, 中本明世, 森岡宏美, 三浦恭代, 藤原尚子 (2016). 成人看護学実習における学生の首尾一貫感覚 (SOC) に影響する要因. *日本看護研究学会雑誌*, 39(3), 203.
- 米田政葉, 高橋恭子, 佐々木浩子, 高橋光彦, 米田龍大, 志渡晃一 (2018). 北海道内の新入学生におけるSense of Coherenceとその関連要因の検討. *北海道公衆衛生学雑誌*, 31(2), 157-162.

受付: 2018年11月30日

受理: 2019年1月28日